

ここ  
— いい音、浦安から —  
浦安音楽ホール



浦安市・日本音楽財団  
名器グァルネリ・デル・ジェス「イザイ」を聴く  
セルゲイ・ハチャトゥリアン  
ヴァイオリン・リサイタル  
ルジーネ・ハチャトゥリアン (ピアノ)

---

2019.4/20 (土) 14:00開演

本コンサートチケット売上の全ては、浦安市文化芸術振興基金に積み立てられ、市民の文化芸術活動の普及振興に使われます。

主催：浦安市 日本音楽財団  
共催：浦安音楽ホール  
助成：日本財団



日本音楽財団  
NIPPON MUSIC FOUNDATION



ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト  
ヴァイオリン・ソナタ 第40番 変ロ長調 K.454  
Wolfgang Amadeus Mozart : Violin Sonata in B-Flat Major, K.454

- I. Largo – Allegro
- II. Andante
- III. Allegretto

セルゲイ・プロコフィエフ  
ヴァイオリン・ソナタ 第2番 ニ長調 作品94bis  
Sergei Prokofiev : Violin Sonata No. 2 in D Major, Op. 94bis

- I. Moderato
- II. Presto
- III. Andante
- IV. Allegro con brio

\*\*\*

セザール・フランク  
ヴァイオリン・ソナタ イ長調  
César Franck : Violin Sonata in A Major

- I. Allegretto ben moderato
- II. Allegro
- III. Recitativo – Fantasia: Ben moderato
- IV. Allegretto poco mosso

曲目解説：柴田克彦（音楽ライター）

モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ第40番 変ロ長調 K.454

ウィーン古典派の天才作曲家ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756–1791）が初期に創作していたヴァイオリン・ソナタは、ピアノ・パートだけでも成立する“ヴァイオリン伴奏付きのピアノ・ソナタ”だった。しかし1777年9月、求職のための「マンハイム・パリ旅行」に出た彼は、旅の途上のミュンヘンで、ドレスデンの宮廷楽長ヨーゼフ・シュースター（1748–1812）が作曲したチェンバロとヴァイオリンのためのソナタ集を知り、両楽器が対等な立場で交替するその二重奏原理に刺激を受けて、本格的なヴァイオリン・ソナタの創作を開始。1781年ウィーンへ移住するまでに多数の作品を生み出した。

この曲は、それからさらに進化した1784年の作品。1785年作のK.481、1787年作のK.526と共に三大ソナタとも称されている。1784年といえば、ウィーンに移って3年が経ち、連日様々な演奏会に出演するなど人気絶頂だった時期。本作は、当時20代前半だったイタリア・マントヴァ出身の女流ヴァイオリニスト、レジーナ・ストリナザッキ（1764–1839）の演奏会で共演するために作曲され、同年4月、ケルトナートーア劇場にて、皇帝ヨーゼフ2世臨席のもとで初演された。ちなみにストリナザッキは、モーツァルトが「非情に優れた奏者。大変豊かな趣味と感覚をもっています」と手紙に記し、ザルツブルクで聴いた父レオポルトも絶賛したほどの名手だった。また初演の際、ピアノ・パートはまだ楽譜になっておらず、モーツァルトが弾くピアノの譜面に何も書かれていないのを皇帝が見つけたとの逸話も残されている。

曲は、主に出版用（＝家庭用）や弟子のために書かれた従来のヴァイオリン・ソナタとは違って、名奏者の公開演奏用だけに、技術的な高度化が顕著。ヴァイオリンとピアノが共に個性を発揮しながら互角に渡り合い対話する、緊密かつダイナミックでスケールの大きな協奏風ソナタとなっている。冒頭から登場する重音奏法、第2楽章中間部の急な和声変化、第3楽章の多彩な楽想など、充実の書法も目をひく。

第1楽章：ラルゴーアレグロ  
重音をまじえた序奏から協奏的な楽想が展開。主部は3つの主題をもち、小鳥のさえずり風のフレーズが耳をくすぐる。

第2楽章：アンダンテ  
抒情的な変ホ長調の緩徐楽章。2つの主題が軸となり、展開部の変ロ短調の歌も心に染みる。学者アーベルトいわく「直截的で、憂鬱なまでの心情の吐露」。

第3楽章：アレグレット  
ガヴォット風の主題を中心に運ばれる、優雅なロンド・フィナーレ。

## プロコフィエフ：ヴァイオリン・ソナタ第2番 ニ長調 作品94bis

旧ソヴィエト連邦を代表する作曲家の一人、セルゲイ・プロコフィエフ（1891-1953）は、ロシア革命を機に西側へ出国していたが、1930年代半ばにソヴィエト連邦へ戻り、スターリン政権下で強制される社会主義リアリズムと自己の音楽的欲求の狭間に苦悩しながら、バレエ音楽「ロメオとジュリエット」や交響曲第5番など、双方の要素を巧みに融合した名作を生み出していった。彼が残した2つのヴァイオリン・ソナタもそうした流れの中で書かれた作品である。

この第2番は、最初フルート・ソナタとして作曲され、ヴァイオリン・ソナタとしても第1番より先に完成された作品（ただし、着手されたのは第1番の方が早い）。原曲は第2次世界大戦中の1943年、独ソ戦から逃れてウラル地方に滞在していた際に作曲され、同年モスクワで初演された。これを聴いたヴァイオリンの大奏者ダヴィド・オイストラフは、流麗な旋律に着目。プロコフィエフにヴァイオリン・ソナタへの改作を進言した。同意したプロコフィエフは彼の助言を受けつつ独奏パートを修正し、1944年に完成。同年6月モスクワにて、オイストラフのヴァイオリンとレフ・オポーリンのピアノにより初演された。

曲は、シリアスで内省的な第1番とは違って、簡潔な構成と旋律美を特徴とする、親しみやすい音楽。古典的な均整美とロマンティシズムに、作曲者一流のアイロニーやウィットがほど良く添加された魅力作となっている。さらにこの版は、ヴァイオリン特有の鋭さと甘美な音色が独自のテイストを加えていることもあって、フルート用の原曲を上回る人気を得ている。

### 第1楽章：モデラート

哀感漂う第1主題と軽やかな第2主題を軸にした簡潔な音楽。

### 第2楽章：プレスト

プロコフィエフらしいシニカルでドライなスケルツォ。イ短調ながらも軽妙な主部に、ニ長調ながらも憂いを帯びた中間部が挟まれる。

### 第3楽章：アンダンテ

へ長調の緩徐楽章。まろやかな主題を中心に、抒情的で穏やかな音楽が流れる。

### 第4楽章：アレグロ・コン・ブリオ

生命力溢れる行進曲風のフィナーレ。リズムカルな主題に2つの主題が続き、哀愁漂う中間部を挟んで、迫力を増していく。

## フランク：ヴァイオリン・ソナタ イ長調

セザール・フランク（1822-1890）は、パリで学び、同地で活躍したドイツ系のベルギー人作曲家。パリのサント・クロティルド教会のオルガニストを長く務め、パリ音楽院の教授として、ダンディ、ショーソンなど多くの「フランク派」の弟子を育てた。

フランクが唯一残したヴァイオリン・ソナタであるこの曲は、彼の代表作のひとつ。10年前に書かれたフォーレの第1番、前年に書かれたサン＝サーンスの第1番と並ぶ近代フランスのヴァイオリン・ソナタの草分け的存在にして、同ジャンルの全作品中、屈指の人気作でもある。「交響曲ニ短調」をはじめとするフランクの主要曲の大半は晩年に書かれており、本作も64歳になる1886年の所産。親しくしていた同郷ベルギーの名奏者ウジェーヌ・イザイ（1858-1931）に結婚祝いとして献呈され、同年ブリュッセルで初演された。ただし、現在は頻繁に演奏されている本作も、オペラやサロンの音楽が主流をなしていた当時のフランスでは、なかなか認められなかったという。

曲は、バッハの研究にも勤しんだフランクのドイツ的な特質とフランス的な美感が融合した独特のテイストをもった音楽。第1楽章冒頭の主題が、全楽章のあらゆる楽想の基盤となる「循環形式」が用いられている。これはフランクがこだわった形式であり、それによる全体の統一感と各楽章の明瞭な性格の違いが見事に両立した傑作となっている。

### 第1楽章：アレグレット・ベン・モデラート

ヴァイオリンの神秘的で優美な主題（最初の3音が全曲の中心となる）に始まる静謐な音楽。下行する第2主題は主にピアノで奏される。

### 第2楽章：アレグロ

一転して力強く情熱的なニ短調の楽章。切迫した第1主題と美しく歌う第2主題が対比されながら進んでいく。

### 第3楽章：レチタティーヴォ＝ファンタジア、ベン・モデラート

自由な形式で書かれた独創的な緩徐楽章。調性に移ろいゆく中、抒情的で表情豊かな語りが続く。

### 第4楽章：アレグレット・ポーコ・モツ

両楽器のカノンで始まる明朗なフィナーレ。冒頭の主題を軸とするロンド形式で書かれ、前楽章までの主題も登場。華やかに結ばれる。



©Marco Borggreve

セルゲイ・ハチャトゥリアン  
Sergey Khachatryan

1985年アルメニアの音楽一家に生まれる。ドイツのカールスルーエ音楽大学でヨーゼフ・リシンに師事。2000年第8回シベリウス国際コンクールでは史上最年少（15歳）で優勝し、さらに2005年ベルギーのエリザベート王妃国際音楽コンクールで優勝した。これまでに、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、フィルハーモニア管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、マリンスキー劇場管弦楽団、フィラデルフィア管弦楽団、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、ニューヨーク・フィルハーモニック、ロサンジェルス・フィルハーモニックなど一流のオーケストラと共演している。また、ピアニストである姉のルジーネ・ハチャトゥリアンと共に、ウィグモア・ホール、シャンゼリゼ劇場、パレ・デ・ボザール、カーネギー・ホールなど著名なホールでリサイタルを行っている。国内ではNHK交響楽団と度々共演しており、ベートーヴェンの協奏曲で共演した2014年には、同楽団の聴衆から「最も心に残ったソリスト2014」の第1位に選ばれた。2015年12月に発売されたアルメニアの作曲家の作品を収録した最新アルバム「マイ アルメニア」や、これまでに発売されたCDは、音楽専門雑誌や新聞などで高く評価されている。日本音楽財団保有グアルネリ・デル・ジェス 1740年製ヴァイオリン「イザイ」を使用している。



©Marco Borggreve

ルジーネ・ハチャトゥリアン  
Lusine Khachatryan

今日のクラシック音楽界において、「鍵盤の詩人」と称される。バーデン文化財団、カールスルーエ音楽大学、ドイツ音楽財団の奨学生として研鑽を積み、2003年にイタリアのマルサラとオストラの両国際ピアノコンクールで、2009年にはフランスの欧州ピアノコンクールで入賞した。これまでに、ロンドンのウィグモア・ホール、ニューヨークのカーネギー・ホール、フランクフルトのアルテ・オーバー、アムステルダム・コンセルトヘボウ等の国際舞台で演奏し好評を博しているほか、室内楽団や交響楽団の共演者として、また、弟のセルゲイ・ハチャトゥリアンのデュオ・パートナーとしても高く評価されている。セルゲイとは共演デビューCDを2002年にEMIクラシックスから発売して以来複数のCDを収録しており、2015年に発売したアルメニアの作曲家による作品を収録した「マイ アルメニア」は権威あるECHO クラシックアワードを受賞した。2012年には、芸術の新しい形として舞台芸術とクラシックピアノを一つの作品として融合させるプロジェクト「ザ・ピアノ・シアター」を立ち上げた。“演劇を通して音楽は新たな次元へ、より明度を増して到達する”とし、これまでにドイツの詩人フリードリヒ・フォン・シラーの劇作品「マリア・シュトゥーアルト」をテーマとした作品や、ショパンやシューマンをテーマとした作品等を、いずれもピアノの演劇作品として制作し、上演している。



©S.Yokoyama

グアルネリ・デル・ジェス 1740年製ヴァイオリン「イザイ」  
Guarneri del Gesù 1740 Violin "Ysaye"

この楽器はベルギーを代表するヴァイオリン奏者ウジェーヌ・イザイ（1858～1931）が所有していたことからこの名前が付けられた。楽器の中には小さなラベルが貼られ、赤いインクで「このデル・ジェスは私の生涯を通じて忠実なパートナーだった。イザイ1928」とフランス語で書かれている。イザイの国葬の際には棺の前をクッションに載せられ行進した名器としても知られ、その後、1965年に巨匠アイザック・スターン（1920～2001）の所有となり生涯愛用された。この楽器は、日本音楽財団が1998年にスターンから購入したものである。